

## 子宮頸がん予防ワクチンについて

皆さんはワクチンで、がんが予防できることを知っていますか。この記事を読んでいるひとの多くは女性なので、子宮頸がんは関心のある病気でしょう。でも、この病気の原因がウイルスであることを知っているひとは、少ないかも知れません。

日本では毎年約15,000人が子宮頸がんと診断され、3,500人も命を奪う病気です。がんという高齢者の病気と思われがちですが、若い女性で増加傾向がみられ、特に20代から30代においては、すべてのがんの中の発症率の第1位となっています。また、発見が遅れた場合は命に関わるだけでなく、子宮摘出などの手術により妊娠・出産の可能性を失い、心身ともに大きな負担となる病気で。

子宮頸がんの原因のほとんどは、HPV(ヒトパピローウイルス)によるものです。このウイルスは、性交によって伝播し、約80%の女性が生涯に一度は感染するとされています。

す。もちろん感染した女性が、全員がんになるのではなく、そのうちの1,000人に1人が、がんに行進といわれています。つまり、HPVの感染を防ぐことができれば、子宮頸がんを減少させることができるのです。がんから体を守るための方法として、もうひとつ重要なことは早期発見です。初期には症状がほとんどないので、早期に発見するためには検診が重要であることは言うまでもありません。しかし、検診の有用性が認められているにもかかわらず、残念ながら恥ずかしさという意識からか、日本の検診率は先進国でも最低のレベルです。

検診率を上げることが重要と述べましたが、それ以外の予防法が子宮頸がん予防ワクチン(HPVワクチン)の接種になる訳です。性交によって伝播するウイルスなので、ワクチンの接種時期はセクシャルデビューする前の11〜14才が推奨されています。このように書く、まるで性病のようなイメージを持つ人

がいますが、正しい認識ではありません。HPVによる感染は、非常にありふれた感染で、特に性のモラルとは必ずしも関係しないものなのです。このがんは女性であれば誰でも罹患する可能性があるのです。このワクチンは、HPVの中でも高頻度に見られる16型と18型の感染をほぼ100%防ぐもので、海外ですすでに100カ国以上で接種されています。16と18型の感染は若い世代に多いこともあり、推奨年齢に接種することにより、若い女性では約90%の子宮頸がんが予防できることがわかっています。日本では平成21年12月22日にサーバリックス®発売され、10歳以上の女性11〜14歳推奨(3回接種)であれば、小児科や産婦人科で接種を受けることができるようになりました。

子宮頸がんは、幼い子どもを残して母親の命を奪い、また母親になる可能性を選択肢を奪ってしまうので「Mother Killer(母親殺し)」とも呼ばれます。子育て真っ最中のお母さんは子どもの健診には一生懸命でも、自身の検診までは気が回らないかも知れません。これを機にぜひ検診を受けて自分の体も大切にしてください。セクシャルデ

ビュー前の接種が効果的と述べてきましたが、既に性交経験のある女性(45才程度まで)でも、効果が期待できることも覚えておいてほしいことです。

病気がワクチンで予防できるといふのは、素晴らしいことです。接種料金などの問題を抱えています。今回の記事ではワクチンによってがんが予防できることを知ることが目的です。そして、女のお子さんには「10才を過ぎたらワクチン接種、20歳を過ぎたら検診」を忘れないようにしたいものです。

## ナビゲーター

小児科専門医

川村 和久

仙台市在住



医療法人社団かわむらこどもクリニック(仙台市)院長。日本一の小児科サイトを運営。「お母さんの不安・心配の解消」を開業理念として診療にあたるだけでなく、様々な子育て支援活動に取り組んでいる。院内報、HP、医療相談、育児サークルなどのユニークな活動が評価され、第1回広報企画賞受賞(NPO HIS研究センター)。「日本の家庭医 08」(アエラ増刊)、こどもの病氣50人の名医(ホスピタウン)、生活ほっとモーニング(NHK)等で活動が紹介。日本外来小児科学会、仙台市及び宮城県小児科医会理事。 <http://www.kodomo-clinic.or.jp>

★「おもちゃたくさん持ったらちょうだい」 有香ちゃん(4歳)

04